



殿さまの茶わん (16)

けれど、殿さまは、毎日お食事のときに茶わんをごらんになると、なんとということなく、顔色が曇るのでございました。

あるとき、殿さまは山国を旅行なされました。その地方には、殿さまのお宿をするいい宿屋もありませんでしたから、百姓家にお泊まりなされました。

百姓は、お世辞のないかわりに、



殿さまの茶わん (17)

まことにしんせつでありました。
殿さまはどんなにそれを心からお
喜びなされたかしのれません。いく
らさしあげたいと思っても、山国
の不便なところでありましたから、
さしあげるものもありませんでし
たけれど、殿さまは、百姓の真心
をうれしく思われ、そして、みん
なの食べるものを喜んでお食べに
なりました。





殿さまの茶わん (18)

季節は、もう秋の末で寒うござい
ましたから、熱いお汁が身体を
あたためて、たいへんうもうござ
いでしたが、茶わんは厚いから、
けっして手が焼けるようなことが
ありませんでした。

殿さまは、このとき、ご自分の
生活をなんという煩わしいことか
と思われました。

いくら軽くたって、また薄手で



殿さまの茶わん (19)

あったとて、茶わんにたいした変わりのあるはずがない。それを軽い薄手が上等なものとしてあり、それを使わなければならぬということは、なんといううるさいばかりなことかと思われました。

殿さまは、百姓のお膳に乗せてある茶わんを取りあげて、つくづくごらんになっていました。

「この茶わんは、なんというもの





殿さまの茶わん (20)

が造ったのだ。」と申されました。

百姓は、まことに恐れ入りました。じつに粗末な茶わんでありましたから、殿さまに対してご無礼をしたと、頭を下げておわびを申しあげました。

つづく

